

(1) 地域の支援者の準備性を向上するための 研修プログラム開発とその効果評価

- **研究代表者**：生島 嗣（特定非営利活動法人ぶれいす東京）
- **研究協力者**：兵藤 智佳（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター）
大塚 理加（国立長寿医療センター研究所）
野坂 祐子（大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター）
大槻 知子（財団法人エイズ予防財団リサーチ・レジデント）
池上 千寿子（特定非営利活動法人ぶれいす東京）

研究要旨

前年に当研究班にて実施した東京都内の相談機関（957カ所）を対象にした質問紙調査の結果、これまでにHIV陽性者とその周囲の人への支援を経験した割合は3割、支援への自己効力感（相談対応のセルフエフィカシー）は、3割が肯定的な評価をしており、7割の相談機関から地域における研修の必要性があるとの回答がよせられた。そこで、今年度は地域の支援者を対象にした、HIV陽性者支援の準備性を向上するための2つの研修方法による研修会を実施し、その効果を測定した。2つの研修の参加者層に違いがあるため、単純に比較することはむずかしい。しかし、それぞれの研修で、当研究班が開発した研修方法の効果が確認された。特にワークショップ研修では、セクシュアリティや性、HIVへの抵抗感が低減され、なおかつ支援の自己効力感が向上した。HIVについての知識を増やすことやプライバシーへの配慮、セクシュアリティへの身近感や対応方法を知ることが、相談対応への準備性を高めるうえで重要であることが示唆された。

A 目的と背景

本研究は、地域において主に生活支援の領域でHIV陽性者支援に関わる専門職を対象にした研修プログラムを開発し、その評価を実施することを目的とした。研修については、地域における「支援の準備性を高めること」を目指し、プログラムの内容を検討した。研修を通じて向上すべきHIV陽性者支援の準備性の内容については、事前にHIV陽性者支援の専門家を対

象としたワークショップを実施し、準備性を構成する要素を分析した。ワークショップの結果から、本研究では、準備性の構成要素として、①知識や情報—具体的には、「HIVの医学的な情報や治療に関する知識を持っている」「セクシュアル・ヘルスに関する知識を持っている」「HIV陽性者支援リソースに関する情報を持っている」、②認識や態度—具体的には、「社会に

存在する HIV をめぐる偏見・差別の問題を認識している」「セクシュアリティや差別・偏見に関する自分の価値観を意識化し、それを相対的に考えることができる」「HIV 以外のケースから HIV 陽性者支援の具体的なイメージが描け、対処に自信感がある」③技能や行動—具体的には、「HIV 特有のケースに関するプライバシーを守ることができる」「セクシュアリティや生き方の多様性に関する配慮をした相談ができる」の3つを定義した。そして、研修の方法については、こうした支援の準備性を構成する各項目に沿って独自にプログラムを開発した。

また、研修内容やその方法については、評価を行うと同時にその汎用性を高めることを目指した。今後、こうした研修が支援職に対して効果的に実施されることで、全国各地で HIV 陽性者支援を実施する上での準備性が高まることが期待できる。

B 方法

HIV 陽性者支援を行う可能性がある地域の専門職を対象に2回の研修を実施した。第1回の研修では、少人数によるワークショップや講義で構成された「講義とワークショップによる研修」、第2回の研修は、講義のみで構成された「講義中心研修」とした。研修の評価については、以下の方法で行った。1つ目は、受講生からの質問や研修についての感想の語りを分析することで評価を行った。また、2つ目として、定量的に研修の効果を分析するために研修の事前事後に質問紙調査を用い、前後の項目ごとの比較を行った(I)。また、研修項目と年齢や相談対応のセルフエフィカシー、支援のイメージの変化との関連を示した(II)。そして、自由記述から、受講者が研修から学んだ内容について検討した(III)。

なお、講義のみの研修(研修2)では、研修

の前後の項目ごとの比較のみを行った。

(倫理面での配慮)

本研究計画は、ぷれいす東京の倫理委員会で承認を得た。調査対象者には、文書で研究の目的、データの保管方法や利用範囲などを説明し、調査への協力の同意を得た。

1 研修の内容

第1回 講義とワークショップによる研修

「地域における HIV 陽性者等支援のための研修会」

本研修は、身体障害、知的障害、精神障害者に対する職業リハビリテーション業務を行う東京障害者職業センターの職員研修として実施した。

対象：東京障害者職業センターの職員

方法：2つのグループに分けて2日(7時間)の研修をそれぞれに行った。

日時：<第1グループ>

1日目…2009年12月1日(火)

2日目…2009年12月2日(水)

<第2グループ>

1日目…2009年12月9日(水)

2日目…2009年12月16日(水)

場所：都内貸会議室

参加者：第1グループ…18名

第2グループ…26名

※ 研修実施前後の質問紙両方に回答した人数は第1グループ17名、第2グループ24名で、合計41名を分析の対象とした。

<研修内容とスケジュール>

No.	項目	内容	
1 日 目	1	アンケートの記入&回収 (13:00 ~ 13:15)	アンケートに回答しなくても研修には参加できるという説明をした上で、同意が得られた参加者による研修前のアンケートの記入・回収
	2	アイスブレイキング (13:15 ~ 13:25)	グループ分けを兼ねて、簡単なゲームを行った
	3	知識と情報 (13:25 ~ 15:00)	HIVの基礎知識と情報の提供を講義形式で行った ①セクシュアリティとセクシュアル・ヘルスに関する知識 ② HIVの医学的基礎知識（映像視聴） ③ HIV陽性者支援に役立つリソースについて 当研究班による調査「東京都内の相談機関における HIV陽性者への相談対応に関する調査」の報告を行った
	4	自己覚知のワークショップ (15:15 ~ 16:20)	参加者が自分の HIV や性に対するイメージ・態度を確認するグループワークを行った ①初めて HIV を耳にしたときは、いつ、どんな情報で、そのときどんなイメージを持ったか ②性について、これまで、そして今、どんな態度をもっているか
	5	まとめ (16:20 ~ 16:40)	フォローアップ&エンパワメント 講師のコメントによるフォローアップと、参加者全員の感想の共有などを行った
2 日 目	6	アイスブレイキング (13:20 ~ 13:30)	グループ分けを兼ねて、簡単なゲームを行った
	7	リーディングワーク (13:30 ~ 14:00)	HIV陽性者やその周囲の人の手記を読み、感想を共有するグループワークを行った
	8	事例ワーク (14:00 ~ 16:05) ※途中休憩あり	当研究班が収集した就労に関する2つの事例を読み、疑問や不安な点を確認し、具体的にどのような支援ができるかをグループで検討した 当研究班による調査「HIV陽性者1,203人の全国調査から見える生活実態から」の報告を行った
	9	まとめ (16:10 ~ 16:45)	フォローアップ&エンパワメント 講師のコメントによるフォローアップと、参加者全員の感想の共有などを行った
	10	アンケートの記入&回収 (16:45 ~ 16:55)	研修後のアンケートの記入・回収

■研修の項目ごとの内容と参加者の反応

知識と情報 / No. 3

目的：支援者が、HIVの医学的な基礎知識や支援に関わる基本的な情報等を得ることで支援の準備性を高める。

方法：講義形式。①と③は、直接講師より講義を行った。②は映像（DVD）を上映した。いずれも、最後に質疑応答の時間を設けた。

<講義内容>

- ①セクシュアリティとセクシュアル・ヘルスに関する知識（30分）
- ② HIVの医学的基礎知識（映像視聴）（30分）
- ③ HIV陽性者支援に役立つリソースについて（30分）

結果：参加者の質問や感想などから、ほとんど

知識がない参加者から実際に支援の経験がある参加者まで、知識レベルも異なることがわかった。「今後は自信を持って対応できそう」という感想などより、ある程度自己効力感を上げることができたと考えられる。

（以下、講義別の結果）

①セクシュアリティとセクシュアル・ヘルスに関する知識

「セクシュアル・ヘルス（性の健康）という言葉は初めて聞いた」「目からうろこであった」などの感想より、性に対する意識の変化が認められた。

② HIVの医学的基礎知識

基本的な事柄に関して多くの質問が寄せられ、知識レベルのばらつきと支援者の不安とが感じられた。

③ HIV 陽性者支援に役立つリソースについて

「医療機関など具体的な問い合わせ先がわかった」「困ったときの相談先がわかった」などの感想があり、自身で直接対応ができなくとも他専門機関に適切につなげばいいという対処の自信につながったと考えられる。一方で、一部の参加者が医療機関の連絡先を知らないという実態も明らかになった。

自己覚知のワークショップ / No. 4

目的：支援者自身が、「HIV についてどのようなイメージを持っているか」「性についてどのような態度であるのか」を知ることで、自分の価値観を相対化する。

方法：1 グループ 4～6 名に分かれて、以下の①②のテーマを検討した。まず各自の意見を付箋紙に書き出し、それらをグループ全員で模造紙にまとめ、最後にグループごとに結果を発表した。

<検討テーマ>

①あなたが HIV について初めて耳にしたのはいつですか？ それはどんな情報でしたか？

それを聞いて、HIV についてどんなイメージを持ちましたか？

②性について、これまで、それから今、どんな態度をもっていますか？

- ・性、セックス、からだのこと
- ・家族、友人関係、他の人間関係で
- ・性について感じる、思うことなど

結果：参加者の積極的な参加態度が見られた。「偏見をとりさるチャンスになった」などの感想より、支援者自身の偏見を自覚し、それを相対化する機会になったと考えられる。しかし、複数の参加者より「講師による、自分の価値観とプロとしてやるべきことを切り離してよいという考えに安心した（納得した）」という感想があった。このことより、多くの支援者が「自分の価値観」と「支援者としての行動」のギャッ

プに悩んでいる実態も明らかとなった。

まとめ（1 日目） / No. 5

目的：フォローアップとエンパワメント。

方法：参加者からの質問に対する回答や補足説明を行った。その後、参加者全員が感想を述べ、共有化した。

結果：感想より、多くの参加者が今までの自分の知識不足・偏見などを自覚し、今回得た知識や情報を今後の対応に生かしていきたいと考えていることがわかった。しかし、まだ「セクシュアリティへの配慮が難しい」などの不安もあり、さらなる支援者への支援も必要と考えられる。また、雇用主である企業への啓発が必要という意見もあり、新たな課題も明らかとなった。講師によるフォローのコメント、「基本的には他の障害者と同じ対応でよいが、セクシュアリティへの配慮が必要」「多様な人がおり、多様な人とふれることが重要」などより、参加者にとっての実際の対応における課題とポイントが明確となった。

リーディングワーク / No. 7

目的：HIV 陽性者の生活のリアリティを感じ、性を含めた多様なライフスタイルを知る。

方法：1 グループ 4～6 名に分かれて、まずリストより自分が読みたい手記を選んだ。その後、他のメンバーと重ならないように調整、朗読の順番を決めた。1 人 3 分の持ち時間内で手記を朗読し感想を述べ、グループ内で意見をシェアした。

結果：「悪意のない言葉が相手を傷つけていることに気付いた」など、過去の自分の行動を振り返るコメントが多くみられ、今までとは異なる視点に気づくことができたと思われる。また、感想には「陽性者も日常を楽しんでいることがわかった」という肯定的な意見から「HIV は大きなマイナスという感覚がある」という否定的な意見までさまざまなものがあり、陽性者の生活をより深く感じることができたと思われ

る。「(親に話さない事例で) こんな大切なことを親に話さないでいいのかと理解に苦しむ」というような疑問や価値観の違いも自覚する機会となった。

事例ワーク / No. 8

目的: 支援者が、実際に HIV 陽性者の支援を行う際の課題やその方法の検討を通して、どのように具体的に HIV 陽性者を支援していくかを考える。

方法: 1 グループ 4～6 名に分かれて HIV 陽性者の就労に関する事例 2 ケースについて検討した。以下のワークシートの項目に各自が分類し、付箋紙に書き出した。その後、それらをグループ全員で模造紙にまとめて、最後にグループごとに発表した。前半 (60 分) では「支援のニーズや困難さ」、後半 (50 分) では「センターができる支援」を検討し、発表した。

<事例>

ケース 1 「体調不良で退職、障害者枠で外資系企業に再就職」

ケース 2 「飲食店で勤務後、障害者枠で就職活動中」

<ワークシート>

	個人に対してできること		雇用主 (企業) に対してできること	
	支援のニーズや困難さ	センターができる支援	支援のニーズや困難さ	センターができる支援
採用前の場合				
雇用中の場合				

※これらは、第 2 グループに対して用いた方法。第 1 グループでは、ワークシートは使用せず、「支援に必要な情報・不明な点」「どんな場面で、どんな支援が必要とされているか」などを検討・発表した。

結果: 「本人の希望を聞きながら支援を進めるのは他の障害者への支援と同じだとわかった」「過去の経験が生かせそう」などのコメントが

あり、支援者の今後の対応への意欲・自信が感じられた。また、「障害者枠で就職活動をしている方が、なかなか決まらないので、『一般枠で受けたらどうか』とすすめてしまった自分が恥ずかしい」などの感想もあり、自らの行動を振り返るきっかけにもなったと考えられる。また、検討していく過程で「陽性者は飲食店で働いてよいのか」など、さまざまな疑問や不明な点が挙げられたが、講師が解説を行うことで理解が深まった。

まとめ (2 日目) / No. 9

目的: フォローアップとエンパワメント。

方法: 参加者からの質問に対する回答や補足説明を行った。その後、参加者全員が感想を述べ、全体で共有した。

結果: 多くの参加者より、今までの自分をふりかえり、無知、偏見、今後の対応への意欲や自信についてコメントがあった。しかし、これで十分というわけではなく、まだ不安や疑問を持っているとのコメントもあり、とくに企業に対する対応に不安をもつ意見が複数あった。講師よりさらに現状の課題の説明もあり、今後の対応の参考になったと考えられる。また、「安心して話せる機会を与えてくれた」「グループワークのファシリテーションが参考になった」など、研修の方法やスキルについての意見もあり、研修方法が参加者に受け入れられていることがわかった。

第 2 回 講義中心研修

「地域における HIV 陽性者等支援のための研修会～対応する際に知っておきたいこと～」

対象: 東京都 (行政関係) の HIV 陽性者等の支援者

方法: 講義形式

日時: 2010 年 2 月 10 日 (水) 13:45～16:30

場所: 新宿区立新宿文化センター 小ホール

参加者: 52 名

<研修内容スケジュール>

No.	項目	内容
1	挨拶と調査協力依頼 (13:45 ~ 13:55)	挨拶と研修会および研究班の趣旨の説明を行い、調査の協力を依頼
2	プログラム評価（事前） (13:55 ~ 14:00)	アンケートに回答しなくても研修には参加できるといった説明をした上で、同意が得られた参加者による研修前のアンケートの記入・回収
3	知識と情報 (14:00 ~ 15:10)	HIVの基礎知識と情報の提供を行った ①「東京都内の相談機関におけるHIV陽性者への相談対応に関する調査」の報告 ②セクシュアリティとセクシュアル・ヘルスに関する知識 ③HIVの医学的基礎知識（映像視聴） ④質疑応答
4	HIV陽性者支援に求められる技能や配慮について (15:25 ~ 16:20)	HIV陽性者支援に必要な技能や配慮を考えるために、当研究班が収集した個別の事例やHIV陽性者を対象とした全国調査の結果を説明した ①HIV陽性者の就労に関する個別事例から ②HIV陽性者1,203人の全国調査から見える生活実態から ③質疑応答
5	挨拶、プログラム評価（事後） (16:20 ~ 16:30)	研修後のアンケートの記入・回収

■研修の項目ごとの内容と参加者の反応

知識と情報 / No. 3

目的：支援者が、相談対応の実態やセクシュアリティ、セクシュアル・ヘルス、HIVの医学的な基礎知識などの情報等を得ることで、支援の準備性を高める。

方法：講義形式。①と②は、直接講師よりスライドプレゼンテーションを用いて講義を行った。③は映像（DVD）を上映した。最後に質疑応答の時間を設けた。

<講義内容>

①東京都内の相談機関におけるHIV陽性者への相談対応に関する調査（15分）

※配布資料あり

②セクシュアリティとセクシュアル・ヘルスに関する知識（30分）

③HIVの医学的基礎知識（DVD上映）（25分）

④質疑応答（0分） ※質問が出なかったため。

結果：多くの参加者は、講義や映像に真剣に耳を傾け、メモをとっており、積極的な態度が感じられた。とくに、最前列で食い入るように説明を聞き、詳細にメモをとる参加者もあり、本

研修会のニーズ・必要性が明らかとなった。しかし、一部ではあるが、映像上映の際に、目を閉じている参加者もあり、映像の内容や手法にさらなる工夫の必要があることがわかった。

HIV陽性者支援に求められる技能や配慮について / No. 4

目的：HIV陽性者の就労に関する事例や生活実態の客観的な調査データなどにより、陽性者の実態を正しく知り、今後、具体的にどのように支援していくかを考える。

方法：講義形式。直接講師よりスライドプレゼンテーションを用いて講義を行った。

<講義内容>

①HIV陽性者の就労に関する個別事例から

②HIV陽性者1,203人の全国調査から見える生活実態から（①②で45分）

※配布資料あり

③質疑応答（10分）

結果：最後の質疑応答では多数の手が挙がり、時間の関係で6名からしか質問が受けられなかったが、多くの参加者が疑問や興味などを

持っていることがわかった。これは、本研修会で扱った内容だけではすべてのニーズに応えることが不十分であるということをも物語っている。質問の内容には、データの読み取り方などもあったが、具体的な支援の場面でどのようにすればよいかというものであった。多くの支援者が、実際の支援の場面で問題をかかえていることが明らかとなった。また、大規模な調査の回収率が66%であることは、非常に高い回収率であるが、回答できなかつた残りの33%にこそ陽性者の問題があるのではないかという意見もあり、今後の調査方法の参考になった。

② 質問紙による調査の方法

本研修の効果を検討するために、質問紙による調査を実施した。研修の実施前後に質問紙への回答を求め、研修の内容に沿った各項目について検討した。質問紙は、無記名・自記式で行い、それぞれの項目についてリッカート尺度を用いた4段階（1～4）で測定した。

質問紙の項目は下記の通りであった。

- (1) HIV についての知識の検討（4 項目）
- (2) HIV 陽性者へのイメージ（2 項目）
- (3) セクシュアリティの多様性（2 項目）
- (4) プライバシーへの配慮（2 項目）
- (5) HIV 陽性者のセクシュアリティ（2 項目）
- (6) 相談対応のセルフエフィカシー（1 項目）
- (7) 支援のイメージ（1 項目）

C 結果と考察

① 受講生からのコメントによる研修の効果 支援者の抱える抵抗感と困難性

第1回目の研修は参加型のワークショップ形式を用いたために、研修を通じて受講生からの多くのコメントを引きだしている。それらのコメントからは、実際の支援の場で働く支援職

が HIV 陽性者を支援するにあたっての困難については、「HIV の漠然とした否定的なイメージによる不安」「性を扱うことへの不安と抵抗感」「同性愛などの性の多様性に対する受容への不安と抵抗感」などが分析された。特に、性については実際に語るという経験が非常に少ないことが明らかとなり、具体的な支援活動のイメージが描けていないことがうかがわれた。

研修の効果について

困難要因が明確になる一方で、研修を終えて得た事柄として、受講生のコメントからは、「支援に必要な知識が増えたことによる安心感」「精神疾患など他分野における過去の支援経験が応用できることへの気づきと自信感」「性に関しては『自分の価値観』を切り離して支援職として行動することが可能との気づき」「具体的な HIV 陽性者支援のリソースを知ることでの安心感」などが分析できた。

また、当初の「準備性」の項目としては想定されていなかった点として、ルールのある中で安心して自己開示ができる場での研修を通じて、「職場におけるコミュニケーションの向上」が見られたことや、また、「ワークショップの方法論が自分の支援活動において参考になった」というコメントがあったことは興味深い。

② 質問紙による調査の結果と考察

結果

研修 1：講義とワークショップによる研修

講義とワークショップによる研修の受講者は44名（男性13名、女性31名）であった。年齢は、20代5名、30代16名、40代12名、50代6名、60代以上5名であり、30代と40代で6割を占めていた。

また、職種は、事務職が1名、専門職が43名であり、専門職の内訳では、就労支援職が39名と9割強を占めていた。それ以外の専門職としては、福祉職1名、その他1名、未記

入3名であった。

HIV陽性者への相談対応は、経験者が14名であり、全体の約3割であった。

I. 研修前後での各項目の比較

2回共に受講があり、研修の実施前後の両方の質問紙に記入があった41名について、それぞれの項目別に対応のあるt検定を行った。その結果、1～5の全ての項目について、研修の効果が認められた(表1参照)。

また、相談対応のセルフエフィカシーについても、研修前に比べて研修後は有意に高かった。支援のイメージについても、研修前に比べて、研修後は有意に高く、HIV陽性者への相談についての準備性は高まったと考えられた。

II. 「講義とワークショップによる研修」の効果について

年齢と項目の得点との相関では、「プライバシーへの配慮」の2項目において、研修前には関連が認められなかったが、研修後には正の関連が認められた($p < .05$)。このことから、プライバシーの配慮に関しては、年齢が高いほど理解が深まった可能性が示唆された。

また、「相談対応のセルフエフィカシー」の

変化と、「支援のイメージ」の変化には、相関が認められた($p < .01$)。このことから、具体的な支援のイメージを持つことが、相談対応のセルフエフィカシーを高めるということが示唆された。

相談対応のセルフエフィカシーの変化は、「ウイルスがコントロール可能」と「HIVの診療医療機関」についての知識の項目、「セクシュアリティの身近感」の項目、「プライバシーへの配慮」の各項目、「陽性者のセクシュアリティ」の各項目との相関が認められた。今後、対象者数を増やし、各項目間の関連を配慮した分析が必要ではあるが、今回の分析結果から、HIVについての知識を増やすことやプライバシーへの配慮、セクシュアリティへの身近感や対応を知ることが、相談対応への準備性を高めるうえで重要であることが示唆された。

III. 自由記述の分析

①情報を新しく得ることの効果

情報を得ること、知識が増えることでの効果として、ネットワークの広がりや支援者としての自己への気づきが挙げられた。

ネットワークの広がりについては、関係機関を知ることにより、今後、具体的な情報提供が

表 1. 講義とワークショップでの研修における各項目の研修前後の得点の比較

	N	研修前得点		研修後得点		t 値	p
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
知識/ウイルスコントロールが可能	41	1.6	0.77	3.4	0.67	-10.95	0.000
知識/人権	41	2.6	0.81	3.5	0.50	-7.34	0.000
知識/医療機関	41	1.7	0.68	3.2	0.69	-10.78	0.000
知識/相談・支援機関	41	2.2	0.85	3.3	0.57	-7.25	0.000
イメージ/身近感	40	2.4	0.71	3.5	0.60	-7.99	0.000
イメージ/抵抗感	41	2.5	0.78	1.9	0.57	6.66	0.000
セクシュアリティ/身近感	41	2.6	0.71	3.2	0.61	-6.08	0.000
セクシュアリティ/抵抗感	41	2.4	0.83	2.0	0.72	3.54	0.001
プライバシーの配慮/必要なこと	41	2.3	0.61	3.2	0.43	-7.86	0.000
プライバシーの配慮/すること	41	2.1	0.61	3.1	0.37	-8.30	0.000
HIV陽性者のセクシュアリティの理解	41	2.2	0.75	3.1	0.42	-7.29	0.000
HIV陽性者のセクシュアリティへの配慮	41	2.1	0.74	3.1	0.41	-7.91	0.000
相談対応のセルフエフィカシー	41	2.7	0.65	3.4	0.50	-6.31	0.000
支援のイメージ	41	2.3	0.87	3.3	0.47	-7.52	0.000

※イメージ/抵抗感とセクシュアリティ/抵抗感は逆転項目

できることや、支援へ生かすことができることが述べられていた。

支援者としての自己への気づきは、これまでの思い込みへの気づきであったり、客観視することの重要性であったり、支援はどうあるべきかという気づきであったりした。これらは、知識が増えること、情報を得ることとともに指摘されていた。

②これまでの支援との比較

これまでの支援やこれまでの自分の対象者との比較により、HIV 陽性者の支援方法がより具体的にイメージできたと感じていた。他の障害者との類似性や、支援方法の共通点を考えるなかで、支援方法が明確化できたと述べられていた。

研修 2：講義中心研修

講義のみの研修の受講者は 52 名（男性 19 名、女性 29 名、未記入 4 名）であった。年齢は、20 代 4 名、30 代 12 名、40 代 18 名、50 代 11 名、60 代以上 2 名、未記入 5 名であり、50 代 2 割と、講義とワークショップによる研修の受講者より多かった。

また、職種は事務職が 8 名、専門職が 39 名であり（未記入 5 名）、専門職の内訳は、就労支援職が 8 名、福祉職が 13 名、医療職が 7 名、その他 6 名と多岐にわたっていた（未記入 5 名）。

HIV 陽性者への相談対応は、経験者が 29 名であり、全体の半数以上であった。

I. 研修前後での各項目の比較

研修に参加し、研修の実施前後の両方の質問紙に記入があった 47 名について、それぞれの項目別に対応のある t 検定を行った。その結果、1～5 の全ての項目について研修の効果が認められた（表 2 参照）。

また、相談対応のセルフエフィカシーについても、研修前に比べて研修後は有意に高かった。支援のイメージについても、研修前に比べて、研修後は有意に高く、HIV 陽性者への相談についての準備性は高まったと考えられた。

D 考察

今回の結果は、限られた対象者における検討であるため、得られた結果の解釈には十分な注

表 2. 講義中心研修における各項目の研修前後の得点の比較

	N	研修前得点		研修後得点		t 値	p
		平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
知識／ウイルスコントロールが可能	47	2.2	0.84	3.4	0.50	-10.17	0.000
知識／人権	47	2.8	0.61	3.4	0.49	-5.81	0.000
知識／医療機関	47	2.6	0.85	3.2	0.59	-4.89	0.000
知識／相談・支援機関	47	2.7	0.71	3.1	0.54	-3.88	0.000
イメージ／身近感	46	2.9	0.65	3.5	0.55	-6.57	0.000
イメージ／抵抗感	46	2.5	0.66	2.1	0.58	4.11	0.000
セクシュアリティ／身近感	47	2.6	0.79	3.1	0.58	-4.47	0.000
セクシュアリティ／抵抗感	47	2.6	0.77	2.3	0.63	2.88	0.006
プライバシーの配慮／必要なこと	47	2.8	0.62	3.1	0.37	-3.30	0.002
プライバシーの配慮／すること	47	2.5	0.59	3.0	0.36	-6.13	0.000
HIV 陽性者のセクシュアリティの理解	47	2.5	0.69	3.1	0.50	-5.76	0.000
HIV 陽性者のセクシュアリティへの配慮	46	2.4	0.65	3.0	0.45	-6.30	0.000
相談対応のセルフエフィカシー	46	2.9	0.57	3.3	0.57	-4.54	0.000
支援のイメージ	47	2.6	0.61	3.1	0.49	-5.12	0.000

※イメージ／抵抗感とセクシュアリティ／抵抗感は逆転項目

意が必要である。特に、2つの研修における対象者については、職種や経験が異なる集団であったため、研修方法の違いによる効果は検討できなかった。ただし、全ての項目において、研修の効果が認められたことは、研修内容の適切さを示していると考えられる。

今後はさらに対象者を増やし、対象者の特性も配慮しながら、研修の効果について検討していく予定である。また、相談対応のセルフエフィカシーの下位尺度として、各項目が構成されている可能性も示されており、さらに詳細な分析を行うことで、対象者に合わせた研修内容を選択するための質問紙を作成できると考えられた。

E 結語

地域の支援者の HIV に対する準備性を高める目的で当研究班が開発した研修方法について、一定の効果が確認された。ワークショップ研修、講義型研修ともに効果が確認されたが、特に個人の価値観にふれる、性やセクシュアリティ、HIV のイメージなどを研修という機会のなかで相対化し、支援者としてそのことをイメージすることは、相談対応のセルフエフィカシーを高めることが明らかになった。来年度にむけて、こうした成果を DVD などの支援者向けツールとしてまとめていく予定である。

F 発表論文等

なし